

氏名	坂 本 慎 一
学 位 の 種 類	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	第 3810 号
学位授与年月日	平成12年 6 月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	渋沢栄一儒学思想の研究 ー儒学的パラダイムからの分析ー
論文審査委員	主 査 教 授 佐藤 光 副主査 教 授 長沼 進一 副主査 教 授 大島真理夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の構成は全 7 章からなる。要旨は次のとおり。

第一章では、渋沢儒学思想の源泉が徂来学と水戸学の正名論にまでさかのぼって検討され、両学の相違点と共通点、および両学と渋沢思想との関連が確認される。徂来学と水戸学は、国体論などの点で相違する反面、道德論よりも政治社会論を重視し、経済発展を推進して「民」の生活の向上を目指すなどの共通点を持ち、主にこの後者の側面が渋沢思想に継承されたとされる。

第二章では、渋沢栄一の自主主義経済思想に焦点が当てられ、『立会略則』の中の「臣としての実業家」などのキーワードの考察を通じて、彼の自主主義的経済思想が、日本儒学思想の伝統を継承したものであったという意味で、アダム・スミスなどの西洋的自由主義経済思想とは異なる思想であることが示される。

第三章では、渋沢思想と田口卯吉の思想の比較がなされ、田口が国家より個人的自由を重んじたなどの意味で、渋沢とはきわめて対照的な思想家であったことが確認される。渋沢においては、個人の自由と並んで、あるいはそれ以上に国家や伝統が重んじられるのである。

第四章では、晩年の主要著作『論語講義』の読解を通じて、渋沢儒学思想のさらなる分析がなされ、従来単なる素人談義の域を出ないとされてきた渋沢の儒教論が、実は、徂来学・水戸学の正名論を厳密に継承した議論であったなどが証明される。

第五章では、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における議論と、渋沢の儒教的な近代資本主義精神論との比較が行われ、渋沢の場合、ヴェーバーのプロテスタンティズムに当たるものが荀学的に再解釈され発展させられた儒教であることが示される。

第六章では、晩年の渋沢の商業擁護論が行き過ぎたものであり、日本儒学とも、また渋沢自身の儒教思想とも矛盾する側面があることが示される。その原因の一つは、渋沢が「官尊民卑の打破」の思想と「抑商思想」を混同して認識していたことにあったとされる。

第七章は、以上六章の要約と総括的な考察である。

このように本論文は、経済思想を中心とした渋沢儒学思想を、その本来の源泉である日本儒学思想にまで立ち返って文献学的に詳細に分析したものである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

以下の理由によって、課程博士授与に値すると判断する。

本論文の最大の特徴は、近代日本資本主義の礎石の一つをつくった渋沢栄一を、渋沢が若年時か

ら強い影響を受けてきた徂来学や水戸学などの日本儒学思想の観点から位置づけ、読解しようとした方法論にある。これは一見したところ平凡な方法に思われがちだが、従来の渋沢研究がアダム・スミスなどの西洋思想の観点からの研究に偏したものであることを考えると、斬新で独創的な視点であることが分かる。

より具体的には以下の点が評価される。

- 渋沢の主要著作はもちろん、その学問的背景となった日本儒学の基本文献、従来の渋沢研究や関連研究などをきわめて幅広く渉猟し、かつその内容を正確に理解している。若年の研究者には珍しく、古文・漢文の読解力にも恵まれている。
- 従来の西洋的観点からの研究では十分に解明されてこなかった渋沢思想のいくつかの側面が明確にされている。たとえば「臣としての実業家」という渋沢思想の基本概念における「臣」の部分は、従来、渋沢思想における前近代思想の残滓として否定的に解釈されるか、まったく無視されることが多かったが、渋沢自由主義思想がある種のナショナリズムを前提とした独特の自山主義思想であることを理解する上で不可欠のものであること、しかもそれが日本儒学の伝統に深く根ざしたものであることが文献学的証拠に基づいて示されている。
- 渋沢の過剰な商業擁護論と儒教思想の矛盾の指摘は、本論文の一貫性をいささか損なうことになったという見方も可能だが、ここではむしろ今後の渋沢研究の発展のための重要な足場を提供したと積極的に評価したい。渋沢思想の欠陥の指摘は、その本質的な意義を確定するためにも不可欠な迂回路である。

本論文には、西洋思想のより深い理解など、さらに彫琢すべき点も残されているが、渋沢思想の全体を対象とし、しかもそれを日本儒学の伝統のなかに位置づけるという本論文の意欲的姿勢は高く評価されてしかるべきであろう。